



写真1 SPS 土層断面



写真3 SX36 出土軒丸瓦



写真2 SX36 瓦出土状況 (北東から)



写真4 SX36 出土軒丸瓦並接合状況

報告書抄録

ふりがな	つじいはいじーだい42じはつくつちょうさうこうくしょー							
書名	辻井廃寺—第42次発掘調査報告書—							
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第114集							
編著者名	福井 優							
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター							
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市西郷町坂元 414番地1 TEL (079) 252-3950							
発行年月日	令和3年(2021年)3月31日							
所収遺跡名	所在地							
辻井廃寺	兵庫県姫路市西郷町坂元414番地1 辻井一丁目784番地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号					
		28201	020162	34° 51' 04"	134° 40' 07"	2020.10.16 ~ 2020.10.21	48.0m ²	宅地造成
		種別	主な時代	主な構造	主な遺物	遺跡調査番号		
寺社跡	奈良時代	柱穴、性格不明な夢込み	瓦	20200320				

例言

1. 本書は、姫路市が株式会社水道地所の委託を受けて実施した、姫路市辻井一丁目784番地に所在する辻井廃寺の発掘調査報告書である。
 2. 調査調査及び発掘作業、報告書の編成は、姫路市教育委員会古跡・学習資源文化財センターが実施した。
 3. 発掘調査で得られた出土遺物、図版、写真等は姫路市埋蔵文化財センターにおいて保管している。

凡例

1. 発掘調査を行った遺跡は、世界地図系（国土地理院2000）に標記する平面図内座標系V系を基準とし、数値はm単位で表示している。
 2. 本書で用いる略称は、東立西平洋海面（T.P.）を標準とし、使用する方針は世界地図標示の標準である。
 3. 土色は、小山正志・村田秀雄編「2003『新版』標準土色帳」25版「日本色彩新規式会社」に準拠した。

辻井廃寺

—第42次発掘調査報告書—



SP27 と塔心礎 (北西から)

2021

姫路市教育委員会

姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第114集

辻井廃寺—第42次発掘調査報告書—

編集集 姫路市埋蔵文化財センター
 発行 姫路市教育委員会
 〒671-0246 兵庫県姫路市西郷町坂元 414番地1
 発行年月日 令和3年(2021年)3月31日
 印刷・製本 松尾印刷株式会社
 〒671-0222 兵庫県姫路市別所町小林494

1 調査に至る経緯

姫路市辻井一丁目 784 番地において宅地造成が計画された（図 1）。当該地は周囲の埋蔵文化財附蔵地である辻井庵寺（県道踏査番号 020162）に該当する。そのため、事業の実施にあたり株式会社赤鹿地所より文化財保護法第 93 条の届出がなされ、姫路市教育委員会生涯学習部文化財課において遺跡の取り扱いについての協議が行われた。辻井庵寺では、これまでに 41 回にわたる発掘調査を実施し、多くの成果を得ている（大谷 2010 前）。今回はそれら既往の調査成果を補認調査に代えることとし、発掘調査の通知に基づき、工事の掘削により遺物が受ける下水道管の敷設箇所および土壁擁壁と一般の道路側溝の掘削範囲を本発掘調査の対象とした（図 2）。調査面積は 48.0 m² である。調査に際しては、姫路市と事業者で委託契約を締結し、姫路市埋蔵文化財センターが現地調査（図 2、第 42 回 次回、遺跡調査番号 2003020）や整理作業等を実施した。現地調査は令和 2 年 10 月 16 日に着手し、同年 10 月 21 日に完了した。調査終了後は出土品等の整理作業を行い、本書の刊行をもって事業を完了した。

2 調査の概要

調査地の現況は水田で、標高は約 19m である。図 3 は調査区の各地点の土層断面である。層名は、耕土を 1 層、旧耕土を 2 層とし、構造埋土・土山は網掛けで表示している。ここで、地山および構造埋出面のレベルについてみてみると、調査区南東隅に位置する断面①では 18.75m、その北側の断面②では 18.8m、調査地の中央付近にかけて位置する断面③では 18.8m、その西側に位置する断面④では 18.9m、調査区西端に位置する断面⑤では 18.8m をそれぞれ測る。これらにより、当該地においては、中央付近に僅かではあるが地山が高い場所が存在し、そこから東西に向けてくじらやかな傾斜しているといえる。現存する土壌がこの高まり上に位置することも、旧地形を利用したものと思われる。

今回検出した遺物のうち、確実な時期を断定できるものは、弥生時代の土坑 2 基、奈良時代の柱穴 2 基（SP5, SP27）および性格不明の落ち込み SX36 ~ 38 について記述する。

2 区で検出した SP5 の平面形は不整であるが、一辺約 90cm の方形を志向していると思われる。柱痕は径約 20cm、深さ約 40cm が残存しており、その隣部分には後世の土壌とともに丸瓦、平瓦の小片が落ち込んでいた。図 4 に示すように、北接する 3 次調査でこれに関連する可能性があるピットを検出している。この 2 の距離は 2.3m で、これを結んだラインは柱根北から 2° 西へ傾いている。なお、丸瓦・平瓦の他に詳細な時期を特定できるような遺物は出土しなかった。

3 区で検出した SP27 は、長辺約 80cm、短辺約 60cm を測り、隅丸長方形を呈する。柱根の位置は径約 30cm で、全体の深さは 45cm であった。ここからも詳細な時期を判定できる遺物は出土していない。また、SP27 については既往の調査結果と合算すると、5×2 間の掘立柱建物を構成すると考えられる（図 4）。

性格不明の落ち込み SX36 から 38 は、4 区の西端で検出した。平面・断面形、堆積土の様子から人為的に掘削されたものではない可能性が高い。ただ、埋設の最終段階に瓦片が投棄されており（写真 2）、從前の調査では「瓦溜まり」として認識している（姫路市埋蔵文化財センター編 2016 ほか）ことから、ここでも同様に記述しておく。今回検出したこれらの瓦溜まりの大半は丸平瓦の小片であつたが、SX36 からは重圓文丸瓦が 1 点突出した（図 7、写真 3・4）。重圓文で中心に珠文を有しており、播磨府河系瓦のうちの本町式にあたる。復元径は約 15 cm を測る。瓦当上半は丸瓦部との接合部分で剥落しており、接合面には布目のうえに斜格子状の刻みを施す（写真 4）。また、外区の側面には范表の痕跡がみえる。

3まとめ

以上のようすに、今回の調査では、SP27 を含む掘立柱建物を検出した。この建物を構成する柱穴の一つが現存する塔礎心に切られているため、寺院の先行遺構と位置付けられている（大谷 2010）。また、これと平行する新たな柱穴列を構成する SP6 も確認することができた。最後に、これら奈良時代の遺構とともに弥生時代中期の土坑等も確認したことと付言しておこう。

[引用]参考文献 大阪府立考古部（2010）「辻井寺：姫路市史跡埋蔵文化財調査報告書」第 1 卷 資料編 考古：姫路市、鎌谷木三衣 1942 「播磨土代寺限石の研究」或武堂、姫路市埋蔵文化財センター編 2016 「辻井庵寺 - 第 42 回発掘調査報告書」姫路市埋蔵文化財センター調査報告書 37 番 姫路市教育委員会



図 1 調査位置図

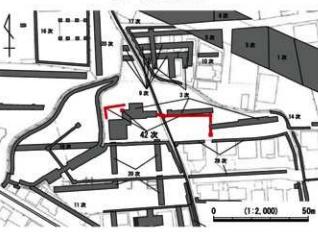


図 2 今回の調査区と既往の調査位置

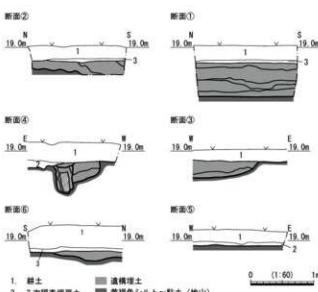


図 3 基本土層図

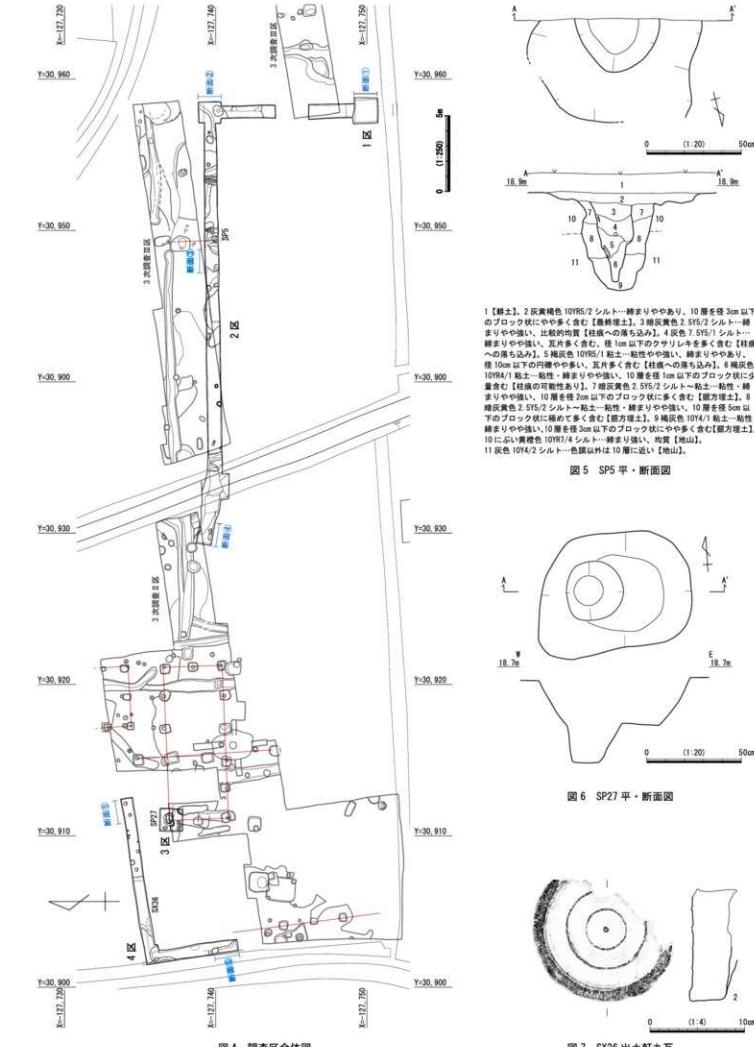


図 4 調査区全体図

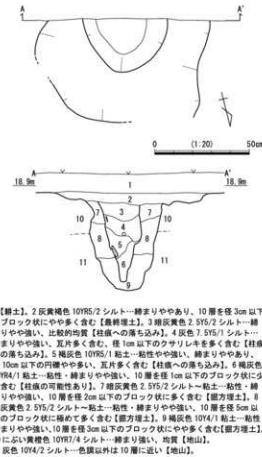


図 5 SP5 平・断面図

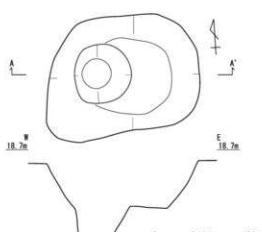


図 6 SP27 平・断面図

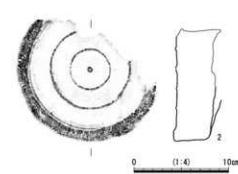


図 7 SX36 出土軒瓦瓦